

聖書：ローマ 15：1～6

説教題：声を合わせて

日時：2016年8月7日（朝拝）

14章からローマの教会にあった問題についてパウロは語っています。その問題とは、教会の中が信仰の弱い人と強い人とに分かれて、互いに争い合い、さばき合っていたことです。すでに見て来ましたように、具体的には3つのことがあげられていました。一つ目は肉は食べて良いのか悪いのか、二つ目はぶどう酒は飲んでも良いのか悪いのか、三つ目は旧約時代のカレンダーに従って特定の日を守るべきか否か。私たちはここを読んで、今日の私たちにはあまり直接には関係がないと思うかもしれませんが。しかしパウロはこの問題について語る中で、クリスチャンが生きるべき大事な原則について語っています。1節：「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。」

「力のある者」とは誰のことでしょうか。私たちはこういう箇所を読むと突然謙遜になって、「私は力ある者ではございません」「私は弱い者でございます」と言って、自分を除外しようとしませんが、もしそうしてしまったら今日の箇所は読む意味がなくなります。「力のある人」というと、特別なエリートのことを言っているようにも思いますが、これまで見て来ましたように、ローマ書14章15章における「信仰の弱い人」は少数者であったと考えられます。ですからその他の大多数はその反対の強い人とされています。パウロはそのローマ教会の大部分の人たちを指して、「私たち力のある者は」と語り出しています。ですから私たちはこれを特定の少数者に限定するのではなく、むしろ多くのクリスチャンを含めて考える方が適切であるということになります。

この「力のある者」とは「神から恵みを受けてきた人」と言うこともできます。もちろんクリスチャンは全員、神から恵みを受けた人ですが、これまで見て来ましたように、ここにおける「信仰の弱い人」とは、イエス・キリストに正しく信頼はしているが、キリストが来られてみわざを成し遂げたことの意義を具体的な日々の生活に適用することにおいて、その洞察が十分でない人という意味でした。つまりその反対の「力のある人」とは、その洞察ができるように神から導かれて来た人のことです。恵みを受けて成長して来た人のことです。ですから私たちは自分が神から恵みを受けて色々教えられて来たことを否定するのではなく、そう簡単に自分を「弱い人」の側に入れてはならないのです。私たちは皆違いますが、それぞれに信仰生活の年を重ねるごとに神から新し

い恵み、新しい洞察、新しい理解を与えられて来たでしょう。とするなら、私たちは恵みにより、「力のある者」にさせられて来ている面があることを認めるべきではないでしょうか。そして大事な点は、そのように恵みを頂いて来た私には「責任」があるということです。それは「弱い人を支える」という責任です。神に導かれて色々分かるようになって来た人は、他の人と自分を比べて、あの人はダメだと高ぶっているようであってはならないのです。神が私たちに恵みをくださったのは、それをもってより弱い人々を助けるためです。神は共同体を祝福するために賜物を分配し、恵みを授けておられるのですから、恵みを受け、成長を導かれて来た人は、その与えられた力を御心に沿って正しく用いなければならないのです。

では具体的にそれはどうすることでしょうか。それはまず、次にありますように「自分を喜ばせるべきではない」ということです。前回、肉を食べる問題について語られましたが、洞察力を与えられている人が分かっていることは、「それ自体で汚れているものは何一つない」(14:14)ということです。神が造られたものはみな良いもので、感謝して受け取るとき、捨てるべきものは何もない。そのことが分かっている。だからもちろん肉を食べても良い。だから私は肉を食べたい！食べればスタミナがつく！元気になる！そして私の心も喜ぶ！何も悩む必要はない！しかしもしその姿を見て心を痛める人がいるならどうすべきでしょう。それでも「これは食べて良いのだから、私は食べる！」という態度を取るべきでしょうか。それが自分を喜ばせるということでしょう。しかしパウロはそうでないあり方を命じました。そのこと自体、神の前で全く問題ない行為であっても、もしそのことで悲しむ兄弟姉妹がいるなら、その人の前では肉を食べず、ぶどう酒を飲まないという選択をする(14:21)。本来ならばして良い権利があることでも、自分の権利・自由を他者への愛によって制限する。それが力のない人の弱さになうということの一つの側面でしょう。

そしてこの「担う」とは、自由の行使を控えるという消極的なことだけではなく、2節にあるように、隣人の益のために積極的に仕えることも含むでしょう。ここに「隣人を喜ばせ」とありますが、これはもちろん相手の言いなりになるということではありません。その後に「その人の益となるようにすべきです」とありますように、隣人の真の利益すなわち霊的成長のために助けるということです。また2節に「その徳を高め」ともあります。これは共同体の建て上げを意味する言葉です。ですから私たちは単に個人のことだけ考えてそのことをするのではなく、教会の成長と完成につながることを望み見

ながら行なうのです。

ではなぜ私たちはこのような歩みをすべきなのでしょう。第二に見て行きたいのはキリストの模範です。3節：「キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、『あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。』と書いてあるとおりです。」パウロはここで最高の模範を私たちの前に示しています。あのキリストでさえ、ご自身を喜ばせなかった。キリストは様々なそしり、侮辱、ひどい扱いを受けました。本来ならご自身の権利を主張すれば、これらを回避することができました。しかしキリストは神の御心になるために、そして私たちの救いが勝ち取られるために、ご自分の自由と権利を捨てられました。ペリピ2章6～8節：「キリストは、神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」この模範の前に私たちはどうでしょうか。まさにこの方のこうした愛と犠牲によって救われた私たちです。そのことに深く感謝している私たちなら、いくらかでも自分もこの方を映し出す歩みをするようにと導かれて当然ではないでしょうか。たとえ私たちがどんなに自分の権利を主張しないで他者に仕えたとしても、キリストが私のためにしてくださったことに比べたら何ほどのことでもないでしょう。

パウロは旧約聖書を引用したついでに4節で聖書の効用について触れています。「昔書かれたもの」とは、ここでは旧約聖書を指しています。それは以前の時代のものだからと言って、現在の私たちにはあまり関係がない書物なのではありません。それらは今の私たちに大切なことを教えるために書かれたのです。一体私たちはそこからどんな有益な教えを受けることができるのでしょうか。ここに聖書は「忍耐」と「励まし」を与えられていると言われています。確かに聖書は色々な箇所ですべて「忍耐するように」と私たちに勧めています。いつの時代の人間にとってもそうでしょうけれど、今日の私たちにとっても大いに足りないのはこの忍耐でしょう。すぐに切れてしまう。それで色々な人間関係をぶち壊し、せっかく作り上げて来たものをみな壊してしまう。しかし聖書は至るところで私たちに「なお忍耐するように！」と語っています。そしてそこには絶えず励ましがセットになっています。決して今の忍耐は無意味でないこと、そこには神がおられて良い目的を持っておられること、神がその間も助け、それに報いてくださると約束しているということ、・・・こうして聖書に導かれて歩む中で私たちは希望へと導かれるのです。

もし私たちが様々な困難の中で忍耐が切れてしまい、目の前の人との関係を壊してしまったら、どうなるでしょうか。そこに続くのは悲惨と苦しみでしょう。しかし聖書を通して忍耐と励ましを与えられて、その道を進むとどうでしょうか。その先には希望の世界が開けて来るのです！今見ている問題について言えば、忍耐と励ましを頂いて進む先には素晴らしい「一致の世界」が開けて来る。神が用意している素晴らしい祝福に立たせていただくことになる。聖書の御言葉を通して、このような「希望」に生かされることこそ、信仰者の特権です。

それゆえにパウロは神に祈ります。5節：「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたをキリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。」 聖書は私たちに忍耐と励ましを与えと言われましたが、その源を遡れば神に行き着きます。その神が聖書を通して忍耐と励ましをあなたがたに与えて、あなたがたにキリスト・イエスにふさわしい一致を与えてくださいますように、とパウロは祈っています。そしてこの一致の重要な目的が6節にあります。「それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」 パウロが一致への勧めを語り、そのための祈りを祈っているのは、単に彼らが平和に歩むためだけではありません。それはもっと重大なことに関わっています。すなわち一致がなければ神への効果的な礼拝がささげられないということです。これは少し考えてみただけでも分かります。兄弟姉妹の間に争いがあり、批判し合う心があるなら、どうして心一つとなった礼拝がささげられるのでしょうか。礼拝しようと思っても必ず妨げられます。マタイ5章23～24節：「祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」 礼拝はクリスチャン生活にとっての生命線です。私たちの霊的ないのちに関わることです。とするなら、いかに私たちの間の一致が私たちの霊的生活に大きな影響力を持っていると言うべきでしょうか。神が召している祝福は、私たちが心を一つにし、声を合わせて神を礼拝し、喜ぶことです。かつては罪のゆえに自己中心で決して一致することなどできなかった私たち。短期間は誰かと一致しても、長続きせず、やがて別れ別れになる私たち。そんな私たちがイエス・キリストにあって心が一つになり、最も素晴らしい神とともにほめたたえることができる。そして「心が一つ」であることが「声を合わせて」という外側の一致においても現われる。実際、礼拝に集まった兄弟姉妹が一つ心で賛美し、また聖書の言葉を読み交わし、信仰告白をし、

祈る人の祈りにアーメンと唱和する時、私たちは何という神の祝福を体験することでしょうか。やがての日にはすべての救われた者が一同に会して、まさに心を一つにし、声を合わせて神を礼拝します。その天での大礼拝の日を待ち望みつつ、今ここにある時からそのような礼拝をささげるように私たちは導かれていますし、またそうするところに神の祝福は豊かに体験されるのです。そしてそうする時に私たちは一層良く神の栄光を世に宣べ伝えることができるのです。

この祝福に私たちは生かされたいでしょうか。そのために必要なことは、ただ「心を一つにし、声を合わせましょう！」というスローガンを掲げることではありません。そのために必要になるのが、1～2節で見たように、私たち一人一人が力のある者、恵みを受けた者として、力のない人の弱さを担うということでしょう。一人一人が自分を喜ばせるのではなく、隣人を支え、その人の益になることは何かと考え、仕える歩みをするでしょう。私たちは神がこれまでくださった多くの恵みを感謝して、弱い人々を助けるという、神が召しておられる歩みへ進みたいと思います。キリストの模範を見つめつつ、キリストによって今日このように立たせていただいている自分であることを感謝して、その模範に従いたいと思います。そして神が愛し、慈しんでおられるすべての人々と素晴らしい一致の内に神を賛美し、その栄光を宣べ伝えるという、神が備えたもう大いなる祝福に益々豊かにあずからせていただく歩みへ進みたいと思います。